

寺社を巡る会

活 動 記 録 書

開催日： 令和5年12月7日(木) 晴れ	開催テーマ： 鎌倉武士（もののふ）たちも歩いた塩の道
開催場所：横浜市金沢区、鎌倉市	記入者：松崎 寛
参加人数： 会 員 25名 ビジター 1名 合 計 26名	
<p>コース：大道中学校前バス停〈鼻欠地蔵前〉（集合）⇒上総介塔⇒朝夷奈切通入口⇒小切通⇒大切通 ⇒朝夷奈三郎の滝⇒上総介屋敷跡⇒太刀洗の水⇒光触寺（ご本尊拝観）〈塩なめ地蔵〉⇒大江広元邸跡前（解散）</p> <p>昨年、雨で中止となったコース。風は強かったが、晴天に恵まれ、横濱金澤シティガイド協会の案内で鎌倉武士も歩いた「塩の道」を探訪した。六浦湊を経て鎌倉と房総を結ぶこの道は鎌倉武士が行き来した道であり、平潟湾岸で作られた塩を鎌倉方面へ運ぶ「塩の道」でもあった。</p> <p>集合場所バス停の前にある「鼻欠け地蔵」。かつて、ここは相模と武蔵との国界（くにさかい）であり「界（さかい）の地蔵」とも呼ばれていた。「江戸名所図会」に写実的に描かれている。そのなかに描かれている道標の一部が、近くの金井氏宅に残っている、とのことだ。</p> <p>朝比奈バス停近くに五輪供養塔と「上総介塔」と刻した黒御影の石碑がある。鎌倉時代の「上総介」は官職名で何人もの対象者がいるが、江戸時代の史記、紀行文等は上総介広常（平広常）としている。広常は、治承4年（1180）2万の兵と頼朝側に参加し、鎌倉幕府の樹立に貢献。朝比奈町内会館でトイレに寄り、いよいよ朝夷奈切通に向かう。</p> <p>「朝夷奈切通」は、鎌倉から六浦に通じる難所だった峠の岩盤を切り開いた峠道。仁治元年（1240）11月三代執権北条泰時が工事計画を決定し、翌年の仁治2年4月に着工した。遅れ気味の難工事であり泰時自らが現場に出かけて督励したと伝わる。崖の上に残された「やぐら」の位置と現状の道の高さをみると、切り開いた高さをうかがい知ることができる、現存する「小切通」、「大切通」からも難工事が想像できる。また、道の維持管理をする道普請は全村民が担っていたというが、たいへんな負担であったろう。昭和44年（1969）に国史跡に指定された。</p> <p>切通は整備された横浜側と違い、下りとなる鎌倉側は水路が整備されておらず、水が道の上を流れ、ぬかるみ状態になっている。歩きにくい道を、皆さんは慎重に足の踏み場所を見つけながら、全員無事に下りた。</p> <p>出口近くに「三郎滝」と呼ばれる小さな滝がある。これは、和田義盛の三男朝夷奈三郎義秀が一夜で切開いたとの伝説によるものだ。</p> <p>滝から横に少し登ったところに「上総介屋敷跡」がある。上総介広常（平広常）は頼朝に不遜な態度をとり、朝廷に弱腰の頼朝に不満だったとされている。寿永2年（1183）、頼朝は武士の棟梁の権威を示すために広常殺害を重臣の梶原景時に命じた。景時は双六の最中に突然盤を乗り越え広常を討ち取った。広常を討った血刀を洗った湧水が「太刀洗の水」として伝わる。</p> <p>光触寺（こうそくじ）《時宗》で本尊の拝観と住職の話聞いた。本尊は阿弥陀三尊。阿弥陀如来は運慶、観音菩薩は快慶、勢至菩薩は湛慶の作と伝わる。本尊は国の重要文化財に指定され「頬焼阿弥陀（ほおやきあみだ）」の別名がある。寺宝の『頬焼阿弥陀縁起絵巻』も国の重要文化財。住職より「頬焼阿弥陀」にまつわる町局（まちのつぼね）と万才（万蔵）法師という召使との話も聞く。普段めったに見られない「頬焼阿弥陀」を拝観出来た貴重な機会となった。</p> <p>境内にある「塩嘗（しおなめ）地蔵」は、六浦の塩商人が鎌倉へ向かう際地蔵に供えた塩が帰りには無くなっていたのは地蔵が嘗めたからだといわれ、この名で呼ばれるようになった。</p> <p>大江広元邸跡の前で、解散した。</p>	
参加者の状況・意見など 山道があり、心配したが、無事終了することが出来た。	
<p>次回の予定： 令和6年1月12日(金)10時 集合場所：京急バス「浄楽寺」バス停 テーマ「和田義盛の運慶仏特別拝観」</p>	